神と人と、獣と。

凛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神と人と、獣と。

【Ｎコード】
Ｎ０７２１Ｚ

【作者名】
凛

【あらすじ】
１０００年後の世界。獣と人が争う世界で、獣として生きるヒトがいた。
異世界召還ものです。生暖かい目で見守っていただければ幸いです。

プロローグ（前書き）

初ですー。

プロローグ

世界を造った神様は、人間が嫌いでした。人間は神様の造ったモノを次々と壊して、人間以外の生き物はたくさん死にました。

神様は泣きました。長い間ずっとずっと、泣きました。それでも、人間が変わることはなかったのです。

神様は思いました。人間達に、気づかせなければ。

自分たちの咎を。

□　□　□

まだ西暦、といものがあったころから数えて１０００年。天変地異か神の怒りか、１つだった世界の大陸が２つに割れた。人間以外のすべての生き物が信じられない速度で進化を遂げ始め、獣は言葉を

操り、科学では証明できない力を使った。獣が都市や町を蹂躙し、植物の進化によって食料が得られなくなり、人間の人口は急激に減っていった。

しかし、それでも人間は滅びはしなかった。

残り少ない技術を駆使して獣を殺し、俗に「魔術」と呼ばれるそれを手にした。そして人間の知恵をもって獣以上の「魔術」の力を手にし、奪われかけていた「片割れの大陸」を取り戻した。

□　□　□

神様はまた泣きました。

人間達はまた、同じことを繰り返そうとしている。また、壊されてしまう。嫌だった。絶対にいやだった。人間にも生きていてほしいのに、人間は他が栄えるのを良しとしない。人間を止められるのは一体なんだろう。考えて考えて考えて――――。

神様が出した答えは、人間だった。

プロローグ（後書き）

プロローグです。

始まりの日。（前書き）

主人公が出ます～

始まりの日。

夜の１２時ごろ。なぜか全然眠れなくて外に散歩にでた。ド田舎であるここでは女1人で歩いててもまったく心配ない。

歩きながらぼーっと空を見上げていると、不意に霧が出てきた。さっきまで完全に晴れ渡っていたのに、おかしい。行っても戻っても、進んでいるのかすらわからない。

「なんなのよ・・・これ」

どうしようもなく突っ立っていると、突然強い風が吹いて、霧が晴れた。

「・・・・・・。」

見渡すと、半端じゃなく深い森だった。いくらド田舎でも、これはありえない。少なくとも近くにはなかったはず――――、ぐるぐる

と混乱していると、目の前に綺麗な女の人が現れた。

びっくりして口が塞がらないでいると、女の人がしゃべり始めた。

「よく来てくれました。咎を持たぬ人の子よ」

「咎・・・？」

「無垢で罪など欠片もないあなたに、私の世界を救ってほしいのです」

ますます意味不明だ。世界を救う？この女の人の？どういうことだろう・・・。

「あなたは誰ですか？あと、世界とかって言うのもよくわかんないし・・・」

女の人は、今にも泣きそうな顔をして、答えた。

「私はこの世界を造った――――、そうですね、神のようなものです。あなたは私がこっちの世界に召還しました。あなたに、獣と人の争いを止めてほしいのです」

「召還・・・？」

「召還の魔術はあなたが死ぬことで解けます。こちらでどれだけ過ごしても、死んでしまえば同じ時間の向こうに帰ることができます」

帰れる。しかも同じ状態で。

「私にできることなら・・・やってみます」

安心して安請け合いしてしまった自分をどれだけ後悔するか。このときはまだ、何も知らなかったのだ。

人でも獣でもない者。（前書き）

獣さんとご対面です～

人でも獣でもない者。

「本当にありがとう。では、早速行ってきてくださいね」

「え？まだ聞いてないこととか――――」

「ある程度のものは差し上げますので。ご武運を祈ってますー」

神様？がひらひらと手を振るとまた霧が出てきて、あっという間に見えなくなってしまった。まさか・・・このまま放り出されるのか。

また強い風が吹いて、元の森に戻ったけれど、そこに神様はいなかった。何故か私が手に持っている緋色の着物？は神様が言っていた「ある程度のもの」のようだ。それに、なんだか体がおかしい気がする。とりあえずもらった着物を着て――――。膝上丈だった。この世界の服とかがどんなものか分からないし、脱ぐわけにもいかないんだけど。

ふっかふかの草の上を裸足で歩く。前の世界じゃこんなのやったことなかったなーと、、またぼーっとしながら空を見ていると、

「・・・っ！人間だ！」

ん？人間って私のことだろうか・・・？てか人間だ！とか人は言わないはず。てことは・・・

「・・・獣？」

真横の茂みがびっくりしたようにがさっと揺れた。神様に獣と人の争いを止めて、といわれたのだから、人間を止めてほしい、ということだろう。つまりは獣さんとは仲良くならないといけないわけで。

「えーっと、何にもしないから出てきてくれないかな？」

「・・・・人間、ここに何のようだ」

さっきの声とは違って低い女の人らしきの声が帰ってきた。

「用、といわれれば・・・仲良くなりたいと言うか・・・？」

途端に殺気みたいなざわざわした空気が私に向けられた。これは完全に疑われちゃってる・・・。

「人間がよく使う汚い手だ。油断させて近づき、取り入ってから殺すのだ」

「っ！ちが――――」

否定などする暇もなく、茂みから私の体の2倍ぐらいある狼が飛び掛ってきた。

「うわぁっ！？」

食べられる！と思ったはずなのに、体が自然と動いて飛び退っていた。

「・・・ほう？」

額から汗がつーっと落ちてったのが分かる。やばいです！これは完全に殺される方向で――――

狼さんがまた飛び掛ってくる。それを紙一重でまたよける。

「だから仲良くなりたいだけで何もしませんってば！」

それでも狼さんはまったく聞いてないようで、止まない攻撃も、何故避けれているのか分からないし怖すぎる！というわけで一か八か、狼さんが飛んでくる瞬間を見切って――――今！

「・・・・なっ」

「おお・・・できた！」

狼さんをキャッチしてみた。それにしても近いと綺麗な目だなー、でも顔がめちゃくちゃ怖いです。狼さん。するとふぅ、とあきれた様に息を吐いてから、私の顔に狼さんが肉球をのせた。やばい、ぷにぷにすぎて気持ちよすぎる・・・！

「本当に攻撃はしてこないのだな・・・。武器も持っておらんようだし・・・」

「だから最初から――――」

「ヴォル、出てきてよいぞ」

ヴォル？ヴォルって誰だろう？と考えていると、さっきの茂みから小さな狼がでてきた。こっちの狼さんとおんなじの、綺麗な銀色の毛並みだった。

「お母さん・・・？」

小さな狼が不安そうにこっちを見ている。

「大丈夫だ。こいつが王が言っていた人でも獣でもない者だろう」

「人でも獣でもない者？」

「お前が、神が争いを止めるために連れて来た咎のない人間だろう？」

そういえば・・・無垢で罪のない、とか言われたような。神様はきっと人間を止める人間がほしかったんだろうと勝手に解釈してるけど。

「うん・・・たぶんそうだと思う」

一瞬目を伏せてから、狼さんが歩き出した。

「ついて来い。王の所へ案内する」

こうして殺されかけたりしながらも、王様に会えることになったのでした。

人でも獣でもない者。（後書き）

次回王様とご対面です～

王との対面。（前書き）

王様登場です～

王との対面。

森の中は木漏れ日が降り注いでいて、すごく心地いい場所だった。ド田舎だったからある程度は慣れているんだけど。

「お前、名はなんという」

「え？っと、燐です」

「そうか、私はラル、この子は息子のヴォルだ」

ラルの後ろをひょこひょこ歩いていたヴォルが、こっちをむいてぺこっとお辞儀をした。やばい。もふもふしたい可愛い。犬とか猫とか大好きなのだ。狼も犬と似てるしきっともふもふしたら気持ちいいだろうな・・・

そんな幸せ回路に入っていると、大きな洞窟の入り口に着いた。王様って言われたからてっきりお城だと思っていたので、なんか変な感じだ。

「王様ってどんな感じ？」

するとラルは少し悲しそうな顔で答えた。

「王は今病に臥せっておられる。今のところ打つ手が無くてな・・・。悪くなる一方なのだ」

「そう・・・なんだ。じゃあこんなときに押しかけちゃだめなんじゃ――――」

「いや。王は咎無き人を心待ちにしておられた。なんとしてでも会ってほしい」

洞窟を進んでいくと、地面が大きく窪んでいて、窪み全体が鳥の巣みたいになっていた。

「王、咎無き人を連れて参りました」

そして顔を出したのは――――、

「やっと来たか・・・・」

巨大な、竜だった。

「う、わぁ・・・・すごい・・・・・！」

「会えて嬉しいぞ咎無き人よ」

竜・・・もとい王様は、金色の角を2本生やした、紺碧の巨大な竜だった。綺麗で、病のせいか儚くも見えた。ぼけーっと眺めていると、王様が巣に手をかけて身を乗り出してきた。

「うわ・・・っと？」

「神からある程度は聞いている。人間を止められるのは人間だけだと、神は言っていた」

「はい・・・。でも、なにをすればいいのかさっぱりで・・・」

王様はすっと身を引くと苦しそうに体を丸めて、顔だけをこっちに向けた。

「人を止める以上、戦うことは覚悟しなければならん。すまないが・・・後のことはラルに聞いてくれ。体調があまり・・・優れない。」

「・・・・・わかりました。王様の病のことも、私なりにがんばって探してみますね」

王様はふっと笑うと、何かを呟えてこっちになげた。

「我の涙で作らせた物だ。それをやるから持っておけ」

そういって眠ってしまったようだった。王様がくれたのは、雫の形をした綺麗な石だった。

お礼を言って洞窟を出ると、外でラルが待っていた。中でのことを話して石を見せると、少し驚いた顔をされた。

「そうか・・・。王がお前にそれをな・・・必ず身に着けておけ。」

「んー、このままだと落としちゃうと思うんだけど・・・」

「そうだな、色々そろえる物もあるし、ついでに何かに加工してもらえばいい。知り合いに武具を取り扱っている者がいるから、そこに連れて行ってやろう」

「武器・・・」

王様に言われた「戦い」という言葉に不安を覚えながらも、前を歩くラルに、ヴォルと一緒について行くのだった。

魂の武器。（前書き）

初の感想をいただきました・・・。

泣いて喜んでます（、・ω・、）

魂の武器。

ラルに連れられてたどり着いた場所は、以外にも普通の小屋だった。

「ゼク！いるか？」

「あー？ラルか？ちょっと待てよー」

中から間延びした声が聞こえてきて、ドアが開いた。中から出てきたのは――――、

「よぉ、ラル。なんだ、お前が人といるのは珍しいな」

「え・・・人間！？」

人間のおじさんだった。

「変なやつだな・・・お前も人間じゃねぇか」

指差して口をパクパクさせていると呆れながら笑われた。

「だって人間ってものっすごく嫌われてるんじゃ・・・？」

「自分たちが間違っている、と考え獣と共に生きる人間もちゃんといる。まぁごく少数だがな」

とラルが教えてくれた。こんな人たちでも、「咎」を背負っているのだろうか。こんな人たちがいてくれるなら、私は必要ない気がする。

考え込んでいる間に話が進んでいたようで、武器の説明が始まった。

「あー、一応武器屋をやっちゃいるが、実際につくるわけじゃねぇ。」

「え？作らないでどうやって・・・」

んー、と唸ってからゼクさんは小屋から大きな剣を出してきた。

「人間ってのはな、1人1人、魂を持ってる。その魂を武器に変えて戦うんだ。俺の魂の武器は、この大剣だ」

私の大きさを軽く超えてしまっている大剣をそっと触ってみると、なぜだか不思議な感じがして髪が逆立ったようにざわざわした。

「お、いい感じだな。ほんの少しだが魂の共鳴が起きてる。その感覚を忘れんなよ」

「はい・・・？」

その後も説明を聞いていくと、どうやら魂を武器に変えられるのは人間だけらしい。獣は爪や牙があるからな、とラルが言っていた。魂そのものである武器は一度出すと戻せないし、完全に壊れると持ち主は死んでしまう。その代わり、通常の武器とは比べ物にならないくらいの力が出せる、ということらしい。

話が最後の方になったところで、ゼクさんが真面目な顔になって、聞いてきた。

「最後に聞いとくが、ほんとにいいんだな？武器に変えちまったら、もう二度と元には戻せねぇぞ」

「・・・はい。神様とも約束しましたから」

ゼクさんはなんとなく納得いかないような顔をしていたが、私はそう返事をした。

このとき心のどこかで思っていたのだ。死んでしまえば帰れるのだから、と。

魂の武器。（後書き）

訂正が入りまくってますが、誤字訂正のみです。（´・ω・｀）

武器の意思。

「じゃあとりあえず、やってみろ」

と言われて、木刀をぽいっと投げられた。え・・・私の武器って木刀!?ゼクさんはなんとなく私の考えが分かったのか、苦笑いされた。

「魂が宿れば自然と形が決まるからな、なんでもいいんだ。」

「そうなんですか」

ふーっと息を吐いて、ゼクさんの武器を触ったときの感覚を思い出す。ざわざわして、気分が高揚するような感じ。思い出せ・・・思い出せ・・・

結構がんばってみたけど、結局木刀はぴくりとも反応しなかった。

「ま、あんま落ち込むな。最初っからできたりしたらびっくりするよ」

今日はもう帰って休めと言われて、木刀を持って小屋をでた。昔人が住んでいた古い家があるそうだ。

「では、私はもう帰るからな。武器のことも色々試してみるといい」

「うん。ありがとうラル、また明日ね」

ヴォル君にばいばーいと手をふってから、扉を閉めた。小さな家だったが、きちんと手入れがされていてきれいだった。お風呂もちゃんとある。お風呂に入って、そこにあった鏡をみると———

「なに・・・これ」

二つにした長い黒髪はそのままだった。なのに、目が真っ赤だったのだ。あの着物のような、燃えるような緋色。

「・・・っ」

なんだか鏡に別の人間が映っているようで、鳥肌がたった。急いでお風呂を済ませてベッドに潜り込む。どうしてだろう？神様が何かしたのだろうか？あの鏡に映った、細くて黒い瞳はなんだろう？そうまるで――――獣のような。

そっと自分の口に触れて、歯を確かめた。こんなときだからなのか、いつもより鋭いような気がしてくる。怖くて怖くて、逃げるように目を閉じた。

□　□　□

「ん・・・・？」

目を開けたはずなのに、なんだか薄暗い。カーテンを開けようとして起き上がって、初めて気づいた。自分の部屋じゃない。

「夢かな・・・」

なんだかふわふわするし、夢かもしれない。

「起きましたか？」

不意に声をかけられて、初めて気づいた。近くに人が立っていたのだ。夢だから怖くは無いけど。

「あなたはだれ？」

すると立っている男の子は可笑しそうに笑っていった。

「やだなぁ、よく知っているじゃないですか。何よりも、誰よりも。僕はあなたの一部だ」

夢の中で私が勝手に考えたんだろうか。それとも――――

「もしかして・・・私の魂？」

男の子が今度は嬉しそうに笑って言った。

「僕はあなたの一部。でも決してあなたじゃない。この世界に来てあなたに生まれた、もうひとつの魂。」

とん、とん、と歩いてから男の子はこっちを見た。その瞳は、昨日鏡で見たあの緋色。

「やっと見つけてもらえたよ。明日起きて、試してごらん。きっと、うまくいくから」

男の子がそういうと、意識が遠のき始めた。

「まって、まだ――――」

そこで、完全に意識が途切れた。

武器の意思。（後書き）

夢の中のお話でした。

人狩り。（前書き）

ちょっとグロテスクな表現があるかもしれないです・・・。

人狩り。

手を伸ばして男の子をつかもうとしたところで、目覚めた。いつもならすぐ忘れてしまうけど、今ははっきりと覚えている。

『きっとうまくいくから』

着物に着替えてから、机の上に置いていた木刀に触れる。するとゼクさんの武器に触ったときと同じ感覚がして、ざわざわと鳥肌が立った。

ふぅっと深呼吸してから、木刀に全力で力を込める。

『ね。うまくいったでしょ？』

笑うような声が聞こえて、目を開けると木刀は緋色の剣に変わっていた。

「あ・・・・・」

ほんのりと火の粉のように光っている緋色の剣。あの男の子の瞳の色。柄を持とうとすると、ぱきんと音を立てて２つに割れた。

「うまく・・・いった？」

手の中で輝く緋色の双剣を見つめて、そうつぶやいたのだった。

□　□　□

「ゼクさんっ！できましたよ魂の武器っ！」

「は？昨日はまだなんにも――――」

ほら、とゼクさんに双剣を見せると、目を見開いて固まってしまった。

「すごいなお前・・・しかもなんで二振りあるんだ？」

「最初は1つだったんですけど・・・割れちゃったんです」

だめだったんですか？と聞くと、

「いや、別にそんなことない。とりあえずおめでとうだな。」

ラルにも報告して来いといわれたので、おじさんにありがとうございましたーといって小屋を出た。

「二つの魂・・・か」

ゼクはそう呟いて、また寝床にもどるのだった。

□　□　□

「ラルーーーー！魂の武器できたよ！」

「ああ、おめでとう。よかったな」

「おねーちゃんおめでとう！」

ラルとヴォルも嬉しそうに祝ってくれた。

「これで、戦うことができるな」

そう言われて、不安になった。『戦い』『争い』私に、人と戦うことができるのだろうか？戦うのならきっと殺さずにいることは難しい。そうやってまた考え込んでいると、ラルが何かを取り出した。

「ここには材料が無いから他の職人に頼んだが、石の加工が終わったぞ。つけてみるといい」

そういってラルがわたしてくれたのは、王様にもらったあの石だった。

「綺麗だなぁ・・・」

磨かれて輝きを増した雫型の石は、髪飾りになっていた。早速結っていた髪をほどいてつけてみる。

「おねーちゃん似合うよー」

「そ？ありがとー」

だんだん懐いてくれるヴォル君がかわいくて仕方が無い。いつかもふもふさせてくれるかな・・・幸せ回路をフル回転させていると、外がなんだか騒がしくなった。ラルの家の扉が勢いよく開いて、熊のおじさん（年齢不詳　が入ってきた。

「今森に人間が入ってきて・・・！人狩りの奴らがいっちまった！」

「またか・・・！燐、私は人間が入ってきた方に行って来る。ヴォルと一緒にいてくれ」

人狩り。言葉だけでなんとなく分かってしまう。神様に言われた『

争い』を止めるためには、今行かなきゃいけないんじゃないか。

「ラル！私もいく！」

怪訝そうな顔をしたが、ラルはうなずいてくれた。

ラルと一緒に森の中を走る。今から起こることを考えると恐怖で頭がいっぱいになりそうだ。走ることに集中する。腰に下げてある双剣の片割れがなんだか熱を持っているような気がした。

「血の匂いがする・・・もうすぐだぞ、燐。本当に行くんだな？」

「うん。ここまできたんなら行くよ」

頷いて目の前に来た茂みを飛び越えると、そこには朱色が広がっていた。

人の子。（前書き）

グロテスク表現があるので苦手な人は控えてください・・・。

人の子。

目の前の光景に、一瞬呆けてしまう。今もじわじわと広がっている赤は、倒れている華奢な女の人から流されていた。美しかったであろう栗色の髪は、血で汚れてくすんでしまっている。そばには小さな女の子が呆然として座り込んでいた。

「止めろシン！」

ラルが大剣を振り上げていた男の人に向かって叫んだ。男の人は鬱陶しそうにこちらを振り返る。銀の髪に、黒にも見えるほど深い青の瞳。その人は私を見て顔をしかめた。

「また人間が増えたのか。神が呼んだとか言うが・・・人間は殺しても殺しても減らねぇな」

「な・・・あなたも人間じゃないですか！」

信じられない。この女の人を今殺したのだろうか？そしてこの小さな女の子もラルが止めてなかったら――。なにもできないって、見ればわかるはずなのに。頭の奥がびりびりして、双剣がやたらと熱い。

「俺は人間なんかじゃねぇ。一緒にするな」

顔を顰めてそう言い捨てて、男の人はどこかへ行ってしまった。今は男の人なんかより、女の子のほうが先だ。目は虚ろで、お母さんだろう女の人の血で、全身汚れてしまっている。駆け寄って抱き上げても無反応のままだ。

「燐。とりあえず私の家へ運ぼう。ここから離れたほうがいい」

ラルはかなり苛立っている様子で、さっさと歩き出してしまった。

振り返って女の人を見ると、広がっていた血がもう変色し始めている。頭の奥がまた痛くなり始めて、さっと目を背けた。

□

□

□

女の子をラルの家で寝かせた後、ラルと一緒に森の中を歩いた。前を歩いているラルはなんだか悲しそうで、いつもより小さいような気がした。女の人は即死状態で、もう助けられなかったらしい。ふ、と息を吐いてからラルが人狩りのことについて話してくれた。

「人狩りをしている奴らも、初めからいた訳ではない。私たちの王も、幾度となく人間達との共存の交渉のために使者を送った。しかし送った使者は皆生きて帰ってはこなかったのだ」

なんとなく、分かる気がする。この世界の人間は、神様に見放されてしまったのだ。自分達だけ進化を許されず、今まで気にも留めなかった獣と、何故仲良くしなければならないのか。人はいつだって、一番でいなければ気がすまない生き物だから。

「そんなことが続いて、ついに獣の中にも人間を根絶やしにしようと考える者が現れ始めた。たとえさっきのように幼い者でもな」

ラルは隣のヴォルを見て悲しそうな顔をした。人間も子供が大切なのは同じだろう？と、私に笑いかける。

「なんとかして止めようとは思っているのだが・・・、黙認する者も多くてな。人狩りは増えるばかりだ。さっきの母親も、生きるために人から逃れてきただけだろうに」

ふと、あの男の人を思い出した。

「そういえば、あの男の人は何故人狩りをするんですか？同じ人間なのに」

「・・・・シンのことか。あいつは人間じゃない、私たちと同じ獣だ。そうだな、お前が私をつかんで受け止めたことがあっただろう？覚えているか？」

はじめてあった時、飛び掛られたことを思い出す。そういえばあの時、私の2倍もあるラルを、どうして受け止められたのだろうか。神様が何かしたのかと思っていたけど。

「あれは軽減（ライト）という、俗に言う『魔術』と呼ばれるものだ。」

「『魔術』？この世界には・・・あるんですか？」

ラルはこくんとうなずいて、その髪飾りにも魔術がかかっている、と教えてくれた。かなり強力なものらしい。

「魔術は魔力があれば大抵のことはなんでも起こすことができる、攻撃、防御、普段の生活でも使われているし、無論姿を変えることもできる」

本当の姿じゃなかったんだ・・・。と、妙に納得する。綺麗過ぎて怖いような人だったし。

「シンが獣でいる姿は私もあまり見たことがないが・・・なにか理由があるのだろう」

ラルはまだなにか言いかけて、今日はもう休め、とはぐらかされてしまった。もっと聞きたかったけど、ヴォル君の肉球でぷにぷにされたら・・・帰るしかない。

双剣を机に降ろして、ベッドにもぐる。鏡はなんとなく、見たくなかった。神様は私に何をしたんだろう・・・？なんだかんだで疲れていた私は、答えを出せないまま吸い込まれるように眠ってしまった。

そこでまた、あの夢を見たのだ。

人の子。（後書き）

中途半端で切れちゃいました（泣

夢の中で。

眠ったはずなのに、すぐに目が覚めてしまった。上半身を起こして部屋を見回すと、前の夢で見た知らない部屋だった。部屋に靄がかかったようにはっきりしないのは、また夢の中にいるという証拠だろう。

「また会えたね」

横を見ると、前に見たあの男の子が立っていた。窓から差し込む月明かりに照らされて、今日は姿がはっきり見えた。私と同じ、真っ黒な髪に緋色の瞳。こんばんわ、といって首を傾けて私に笑いかける。笑うとまるで女の子のようだった。

「あなたは誰？」

あいさつもせずに、前と同じ質問を投げかける。男の子は特に気を悪くした様子もなく答えた。

「僕の名前はアルス・ノア。武器のこと、うまくいってよかったね」

と、またにっこり笑った。夢を見た後にあっさりできてしまった武器の具現化。この子が・・・ノアが、何か手伝ってくれたのだろうか。

「えっ・・・と、ありがとう、ノア」

そういうと困ったような曖昧な顔をして、あたしの寝ているベッドに腰掛けた。足を子供みたいにぶらぶらさせながら、月を見つめている。

「なんで、斬らなかったの？」

「・・・・え？」

いきなり声をかけられて戸惑ってしまう。斬る？何を？

あの人間の姿をした獣のことだよ、とまた笑った。

「怖いって、思ったでしょ。分からないことをするあいつが、怖いって」

ノアは何を言っているのだろう。確かに怖かったけど、斬る？そして何故ノアはあのときのことを知っているのだろう？月明かりに照らされて、私に向けられた緋色の瞳が怪しく光っている。背筋にぞくっと寒気が走った。

「あーあ。せっかくあのとき、使ってもらえると思ったのに」

呆れたような声でそういって、ノアがすとんと立ち上がった。月明かりの当たらない影まで歩いていって、こっちを振り返る。

「人間でいるだけじゃ、だめなんだよ」

ひどく冷たい声音で、そういわれた。視線もさっきの笑顔など嘘のように鋭い。怒らせてしまったのだろうか？喉がごくり、と音を立てて、空気が一気に緊張する。怖いのに、瞳から視線をはずすことができない。

「人間でもあり、獣でもある。神様が求めたのは、そういうイキモノなんだから」

怪しく笑いながら、ノアが進み出て、私の頬をするりと撫でた。ラルに言われた、獣でも人間でもない者。ノアが言う、人間でもあり、獣でもあるイキモノ。私はどちらになればいいのだろう。それともどちらでもないのだろうか。

「そのうち、きっとわかるよ。自分が何で、僕がどういう意味を持つのか」

ノアがそういうと、霧がかかったように意識が薄くなった。

「待って、ノア。あなたは――――」

やっと出るようになった声を振り絞る。意識が完全に切れる直前、ノアの冷たい無表情な瞳を見て、私は確信にも似た思いを抱いていた。

あの時、鏡に映った獣の瞳は、やはり自分ではなかったのだと。

あれは間違いなく、ノアだった。

夢の中で。（後書き）

意味わかんなくなっちゃってますね・・・（´・ω・｀）

もっと上手にかけたらいいのに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0721z/

神と人と、獣と。

2011年12月5日23時05分発行